

# アレキシサイミア傾向者の家族システムと 家族内感情体験の特徴について

—Family System Test を用いた検討—

馬場 天信\*・興津真理子\*\*・中西 美和\*\*\*

Family system and emotional experience of alexithymia :

From the view point of Family System Test

Takanobu BABA, Mariko OKITSU, Miwa NAKANISHI

## 要 約

アレキシサイミアは、心身症の特徴として概念化され、感情への気づきや描写の乏しさを特徴とする感情制御の障害として現在は定義されている。本研究では、Toronto Alexithymia Scale によって測定されたアレキシサイミア傾向者が自らの家族システムをどのように認知し、更に、家族内でどのような感情体験を行っているかを明らかにすることを目的とした。家族システムの特徴をアセスメントするために、Family System Test を用い、現実の家族場面、葛藤的な家族場面、理想的な家族場面について人形を配置させ、父、母、本人の3者関係における親密性の距離、および、影響力を示す人形の相対的高さについて計測し、High-alex 群、Med-alex 群、Low-alex 群における違いを分散分析によって検討した。分析の結果、親密性については、現実場面では父子間の距離が父母間、母子間の距離よりも長く、理想場面では父子間と母子間が父母間よりも距離が長いことが明らかとなった。また、葛藤場面のみ交互作用が認められ、アレキシサイミア群は父母間の親密距離が短いことが明らかとなった。一方、階層性の違いについては、現実場面でアレキシサイミア群は父、子と比較して母親の影響力が強く、しかも、その影響力の強さは他の2群 (Med-Alex 群、Low-Alex 群) よりも高い点であることが特徴的であった。感情体験については、感情体験の「悲しみ」カテゴリーにおいて High-Alex

---

\*追手門学院大学心理学部

\*\*同志社大学心理学部

\*\*\*大阪女学院大学

群と Low-Alex 群に違いが認められ、アレキシサイミア群は家族内で悲しみ感情を多く体験していることが明らかになった。また、家族同士での感情表出の「恐れ」カテゴリーについても違いが認められ、High-Alex 群が家族同士でお互いに恐れ感情を表出しあっていることが明らかとなった。以上の点から、アレキシサイミア傾向者が認知している現在の家族システムは纏綿状態に近く、葛藤場面など状況が変化しても親密さの距離が変化しないという問題を有していることが示唆された。また、心身症患者の親子関係で一般的に指摘されることが多いように、母親の過干渉や過保護という特徴が影響力の高さから明らかとなった。

キーワード：アレキシサイミア、Family System Test (FAST)、家族システム、親密性、階層性、感情体験

## 問 題

### 1. アレキシサイミア概念と測定尺度

アレキシサイミア (Alexithymia) とは、アメリカの精神科医であり精神分析家でもある Sifneos (1973) が、古典的な心身症患者への治療経験をもとに概念化したギリシャ語から構成された造語である。A は「欠如」を、lexis は「言葉」を、thymos は「感情」を指しており、語源的には「情動・感情の言語化についての障害」を意味している。概念的にはその特徴として、1) 感情への気づきの困難さ、2) 感情描写の困難さ、3) 夢に代表されるような想像機能の欠如、4) 外的な事実関係に注目する認知様式、の4点で概念化されている (Taylor, 1984)。また、それらを測定する信頼性と妥当性を兼ね備えた尺度として、26項目で構成されている Toronto Alexithymia Scale (TAS; Taylor, Ryan, & Bagby, 1985) が完成し、TAS 邦訳版についてはその有用性は宮岡・寺田・濱田・北村・片山・中山 (1991) によって確認され、具体的な項目は宮岡 (1996) の論文に示されている。その後、若干の改訂が加えられて Toronto Alexithymia Scale-20 (TAS-20; Bagby, Parker, & Taylor, 1994; Bagby, Taylor, & Parker, 1994) が完成し、TAS-20 邦訳版 (小牧・前田・有村・中田・篠田・緒方・志村・川村・久保, 2003) は、厳密なバックトランスレーションを経て作成されている。TAS と TAS-20 のいずれも、信頼性と妥当性を兼ね備えたアレキシサイミア尺度とされているが、現状では TAS-20 が主流となっている。TAS から TAS-20 への改訂に伴い、TAS の下位尺度の一つであった「想像性貧困」因子が削除されるに至ったが、その他の因子項目の内容は TAS と TAS-20 はほぼ同じもので構成されている。Taylor, Bagby, & Parker (1997) によれば、この因子が白昼夢などについて尋ねる項目が含まれているために、社会的望ましさによる回答バイアスの影響を受ける可能性が憂慮されて削除に至ったとされているが、実際のところその根拠は乏しい。また、概念提唱者である Sifneos は、アレキシサイミア概念の中核的要素である空想力の貧困さを重視するという立場から、幾つかの尺度を比較するなかで「想像性貧困」因子を含んだ TAS を用いることを勧めている (Sifneos, 1996)。

### 2. アレキシサイミアに関する家族環境要因

アレキシサイミアは精神分析的な臨床実践から概念化されたこともあり、その成因要因の一つとして家族環境要因が注目され、具体的には過去の愛着形成、養育態度、家族機能といった側面に焦点が当てられてきた。愛着理論を援用した研究では、成人愛着スタイルとアレキシサイミアとの関連性から、幼少期の愛着形成の問題を推論的に指摘している。例えば、愛着スタイルの回避的愛着 (avoidant attachment)、あるいはそのなかの恐れ型愛着 (fearful attachment) がアレキシサイミアと関連が強く、これらの愛着パターンがアレキシサイミアを媒介して症状報告の増加を招くことを明らかにしている (Wearden, Cook, & Vaughan-Jones, 2003; Wearden, Lamberton, & Walsh, 2005)。この恐れ型愛着とは、親密さへの不安と社会的回避を特徴とする愛着パターンを

さし、自己へのネガティブな信念や期待を持つと同時に、他者に対してもネガティブな信念や期待を持ちやすいことを意味するものであるが、アレキシサイミアの対人関係に生じる問題の基盤としてこれらを助長するような幼少期の母子関係が存在することを示唆するものである。また、母親の養育態度に注目した研究では、アレキシサイミア傾向が高い者ほど、幼少期に母親から受ける養護 (Care) が少なく、無関心あるいは拒絶的な態度で関わられた体験が多いことが明らかになっている (Fukunishi & Paris, 2001 ; Fukunishi, Sei, Morita, & Rahe, 1999)。

過去の家族環境に関する研究では、家族の機能不全の高さや感情表出や感情コミュニケーションの低さに注目したものが多く、例えば、Mallinckrodt, King, and Coble (1998) は、家族のなかで分離への恐怖を強く感じていた者ほどアレキシサイミア傾向が高く、現在のセラピストに対する安心感 (Secure) の低さにそれらが影響することを明らかにしている。また、King and Mallinckrodt (2000) は、分離への恐怖、親子間の役割逆転といった家族における機能不全の高さ、あるいは、家族がそれぞれ自由かつ容易に感情を表出したり、自立を励ましたりする健康な家族環境の少なさを報告している。

一方、アレキシサイミアの観点から家族全体における感情表出性に注目した研究では、家族成員がお互いに感情を自由に直接的に表出することへの許容度が低いことを示唆する報告がなされている (Kench & Irwin, 2000 ; Yelsma, Hovestadt, Anderson, & Nilsson, 2000)。また、感情価の違いから感情表出性に注目した Berenbaum and James (1994) の研究では、家族におけるネガティブな感情表出性の低さよりも、褒めるといったポジティブな感情表出性の低さがアレキシサイミアの家族に特徴的であるとの指摘もなされている。その他の家族環境要因の側面については、凝集性、知的文化的志向性の低さ、あるいは葛藤、纏綿状態 (Enmeshment ; 家族成員がお互いに過剰に反応し合い、問題に巻き込まれ、各成員の自律性が阻害される状態を指す)、自由放任な家族スタイルの高さ、などがアレキシサイミアの過去の家族環境要因の特徴として指摘されている (Kench & Irwin, 2000)。

### 3. 先行研究の問題点と本研究の位置づけ

このように、家族環境要因に注目してきたこれまでの研究では、アレキシサイミアの形成要因に注目し、過去の家族環境が与える影響の大きさを示唆してきた。特に、幼少期における安心感や愛情の伴った養育体験の少なさ、あるいは感情を自由に表出することが許容されない雰囲気や家族機能不全といった問題がアレキシサイミア形成プロセスに大きな影響を与えていることを明らかにしている。しかしながら、心理療法的介入を念頭におけば、形成要因としての過去の家族環境要因を明らかにすることと同時に、現在の家族関係や家族機能の特徴を明らかにする必要があると言える。驚くべきことであるが、現在の家族環境要因に注目した研究は現在のところ2つしか報告されておらず、この点については明らかになっていない点が多い (Lumley, Mader, Gramzow, & Papineau, 1996 ; Yelsma, Hovestadt, Nilsson, & Paul, 1998)。また、家族環境要因に関

する研究は、全て質問紙調査によるものであり、家族全体の特徴を相対的な主観評定に基づいて捉えられているものの、個々の関係性や影響力の違いについては正確に把握できていない。家族機能や家族システム、あるいは家族成員間の力動関係は、家族の中に生じる出来事や状況の変化によって変わりうるものであるが、過去の調査研究ではこれらの状況要因についても注目していない。以上の問題点を踏まえ、本研究ではアレキシサイミアの現在の家族システムの特徴を Family System Test を用いて明らかにし、更に家族内での感情体験の特徴を検討する。

## 目 的

本研究では、先行研究の問題点を踏まえ、三次元空間に家族成員の人形を表現させる Family System Test (FAST) を用い、アレキシサイミアが現在の家族構造をどのように捉えているか明らかにすることを目的とする。具体的には、従来の質問紙研究では捉えることが困難であった、両親と子どもの親密さや影響力の違いについて、各家族成員を人形に見立ててその距離や高さで表現させ、計量的にその特徴について明らかにする。また、3場面（現実場面、理想場面、葛藤場面）をイメージさせて、それぞれ配置させ、状況変化に伴う家族力動の違いについても検討する。更に、家族内におけるアレキシサイミアの主観的感情体験の有り様について、質問紙調査も加えて検討する。

## 方 法

**調査対象者** 調査の趣旨と内容について説明した上で、調査の参加に同意し FAST の実施と、その後に質問紙への回答を済ませた 4 年制私立大学の大学生 81 名（男性 36 名、女性 45 名）とした。対象者の平均年齢は 18.64 歳（SD=0.81 歳）であった。

### 調査内容

**アレキシサイミア尺度** Toronto Alexithymia Scale (Taylor et al., 1985) の日本語版（馬場・佐藤・鈴木, 2001）を用いた。この TAS 日本語訳は、TAS の項目のうち TAS-20 と重複している項目については TAS-20 邦訳版（小牧他, 2003）の翻訳項目を、その他の項目については宮岡（1996）の翻訳項目を採用したもので、内的整合性が高いことが確認されている（馬場他, 2001）<sup>1)</sup>。回答形式は「全くあてはまらない=1」から「非常にあてはまる=5」までの 5 件法であった。

---

1) 小牧他（2003）は翻訳項目を未掲載としており、2000 年の段階で個人的に許可を得て日本語訳を入手して使用させて頂いたため馬場他（2001）の論文と年号が前後している。

**感情質問紙** 被調査者自身の家族内における 1) 感情体験、2) 感情表出、3) 感情抑制、4) 家族同士での感情表出、についてその程度をそれぞれ尋ねるものを作成した。評定させる感情語は、Shaver, Schwartz, Kirson, and O'Connor (1987) の感情的階層クラスターの項目を参考に抽出し、申し訳なさ、いらだち、腹立たしさを追加して、4つの感情カテゴリーを採用した。具体的には、「楽しさ」(喜び、幸せ、嬉しさの3項目)、「悲しみ」(悲しみ、落胆、罪悪感、申し訳なさの4項目)、「怒り」(怒り、敵意、憎しみ、軽蔑、苛立ち、腹立たしさの6項目)、「恐れ」(うろたえ、不安、恐れ、心配の4項目)の合計17の感情語項目についてそれぞれ回答させた。なお、質問紙の1)では「家族のなかで以下に示す感情をあなたが感じることはどれくらいありましたか」とし、「全くなかった=1」～「非常に良くあった=5」の5件法とした。2)については「家族のなかで以下に示す感情をあなたはどの程度表出してきましたか」とし、「全く表現してこなかった=1」～「非常に良く表現してきた=5」とした。また、3)については「家族のなかで以下に示す感情を、あなたはどの程度、表現することを抑えてきましたか」とし、「全く抑えてこなかった=1」～「抑えることが非常に多かった=5」とした。4)では「家族同士で気持ちを表現することがどの程度ありましたか」とし、「全く表現してこなかった=1」～「非常に良く表現してきた=5」とした。

**FAST 装置と実施手続き** FAST (Beltz Test 社製)を用いた。検査用具は、9×9の碁盤の目状のテスト盤、目と口が描かれた人形、影響力の強さ示す3種類の高さの異なったブロックから構成されており、検査者と1対1の個別で実施した。FASTでは、現実場面、理想場面、葛藤場面の順に表現を求め、それぞれの場面で人形をテスト盤に配置させ各家族成員間の親密性を距離で表現させてから、ブロックの高さで家族構成員の階層性(影響力の強さ)を表現させた。具体的には「あなたの家族がいま現在どのような関係にあるかを表現して下さい。まず、家族メンバーがどのように仲が良いかを盤上に人形を使って表現して下さい。次に、現在あなたの家族メンバーの力関係あるいは影響力を、ブロックを使って表現して下さい」と教示した。なお、理想場面、葛藤場面については、現実場面をどのように変えれば理想と考えるものに近づくか、あるいは、あなたの家族に最悪の強い葛藤があると考えて家族成員の人形を配置させた。実施法の詳細についてはゲーリング・八田・池田・相谷(1997)に準拠した。

## 結 果

### FAST の分析

本調査対象者における TAS 合計得点の平均値は 70.09 点 (SD=9.35 点)であったため、平均値 $\pm$ 1SD を基準に3群に分けた。具体的には、80 点以上を High-Alex 群 (12 名)、80 点未満～61 点以上を Med-Alex 群 (58 名)、60 点以下を Low-Alex 群 (11 名)とした。次に、FAST にお

いて表現された父、母および参加者自身（子）の3者間における親密性距離、および階層性得点を算出した。親密性については、盤上の隣接区画の距離を1とする人形間のユークリッド距離を算出し、場面毎に、父母間、父子間、母子間の距離をそれぞれ算出した。また、階層性得点は、絶対的な高さ表現を計算する方法があるが、本研究では相対的な影響度を重視することとして、最小ブロックを1として、高さで表現された影響力の大きさを父、母、参加者自身（子）についてそれぞれ算出した。

親密性距離については、アレキシサイミア（High-Alex 群・Med-Alex 群・Low-Alex 群）を参加者間要因、2者関係（父母・父子・母子）を参加者内要因とする2要因の分散分析を行った。また、階層性得点については、アレキシサイミア（High-Alex 群・Med-Alex 群・Low-Alex 群）を参加者間要因、家族成員（父・母・子）を参加者内要因とする2要因の分散分析を行った。なお、FASTでは、家族成員の配置を行う場面として、現実場面、理想場面、葛藤場面の3場面が設定されているが、本調査では場面ごとに上記のデザインで2要因の分散分析を繰り返し行った。

#### 親密性についての分析

親密性についての結果を Table 1 に示した。分散分析を行ったところ、現実場面、理想場面、葛藤場面ともに2者関係の主効果が認められた（順に  $F(2,156) = 9.81, p < .01$ 、 $F(2,156) = 13.95, p < .01$ 、 $F(2,156) = 5.16, p < .01$ ）。Tukey 法による多重比較を行ったところ、現実場面では父子間の距離が父母間、母子間の距離よりも長く、理想場面では父子間と母子間が父母間よりも距離が長いことが明らかになった。また、葛藤場面のみ交互作用に有意傾向が認められたため（ $F(4,156) = 2.10, p < .10$ ）、単純効果の検定を行った。その結果、父母間におけるアレキシサイミアの効果、Med-Alex 群における2者関係の効果が有意であり（ $F(2,184) = 3.51, p < .05$ 、 $F(2,156) = 6.20, p < .01$ ）、Low-Alex 群における2者関係の効果が有意傾向であった（ $F(2,156) = 2.36, p < .10$ ）。これらについて HSD 法による多重比較を行ったところ、葛藤場面における父母間の親密距離は High-Alex 群が他の2群よりも短く、Low-Alex 群では父母間よりも父子間の距離が長くなることが明らかになった。なお、Med-Alex 群について多重比較を行ったところ有意なものは認められなかった。

#### 階層性についての分析

階層性のデータを Table 2 に示した。分散分析の結果、現実場面、理想場面、葛藤場面ともに家族成員の主効果が認められた（順に  $F(2,156) = 90.53, p < .01$ 、 $F(2,156) = 50.12, p < .01$ 、 $F(2,156) = 5.16, p < .01$ ）。Tukey 法による多重比較を行ったところ、現実場面では父、母、子の順で階層性に違いが認められ、理想場面では子よりも父、母の階層性が高く、葛藤場面は理想場面と同じ差異が認められた。また、葛藤場面については、交互作用に有意傾向が認められたため

**Table 1** 親密性距離についての分散分析結果

	2者関係の距離						多重比較 (Tukey 法)
	父母間		父子間		母子間		
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
現実場面							
High-Alex 群	1.15	(0.31)	2.24	(1.30)	1.83	(0.89)	
Med-Alex 群	1.90	(1.65)	2.40	(1.53)	1.84	(0.92)	
Low-Alex 群	1.93	(1.12)	2.73	(2.96)	1.89	(1.75)	
群平均	1.66	(1.03)	2.46	(1.93)	1.85	(1.19)	父子 > 父母、母子
理想場面							
High-Alex 群	1.15	(0.31)	2.17	(1.73)	2.10	(1.58)	
Med-Alex 群	1.32	(0.67)	1.84	(0.89)	1.68	(1.05)	
Low-Alex 群	1.77	(1.46)	2.76	(2.94)	1.85	(1.76)	
群平均	1.41	(0.81)	2.26	(1.85)	1.88	(1.46)	父子、母子 > 父母
葛藤場面							
High-Alex 群	1.91	(1.08) <sup>ab</sup>	2.84	(1.56)	2.50	(1.59)	
Med-Alex 群	3.90	(3.23) <sup>a</sup>	3.75	(2.33)	2.80	(1.59)	
Low-Alex 群	3.07	(1.87) <sup>b,c</sup>	4.70	(3.82) <sup>c</sup>	3.51	(2.82)	
群平均	2.96	(2.06)	3.76	(2.57)	2.94	(2.00)	父子 > 父母

注) 同じアルファベット間に有意差が認められていることを意味する。

**Table 2** 階層性についての分散分析結果

群	相対的な階層性						多重比較 (Tukey 法)
	父		母		子		
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
現実場面							
High-Alex 群	2.58	(1.08)	2.41	(1.08)	0.91	(1.08)	
Med-Alex 群	2.24	(0.94)	1.84	(0.96)	0.44	(0.67)	
Low-Alex 群	2.27	(1.79)	1.72	(1.10)	0.54	(0.82)	
群平均	2.36	(1.27)	1.99	(1.05)	0.63	(0.86)	父 > 母 > 子
理想場面							
High-Alex 群	1.91	(1.16)	1.83	(1.40)	0.75	(1.05)	
Med-Alex 群	1.58	(1.47)	1.31	(1.06)	0.39	(0.64)	
Low-Alex 群	1.54	(1.21)	1.81	(0.98)	0.72	(1.00)	
群平均	1.68	(1.28)	1.65	(1.15)	0.62	(0.90)	父、母 > 子
葛藤場面							
High-Alex 群	1.91	(1.24) <sup>ab</sup>	2.58	(0.99) <sup>a,c,f,g</sup>	0.91	(0.99) <sup>b,c</sup>	
Med-Alex 群	1.93	(1.60) <sup>d</sup>	1.39	(1.05) <sup>e,f</sup>	0.44	(0.93) <sup>d,e,h</sup>	
Low-Alex 群	2.00	(1.78)	1.45	(1.21) <sup>g</sup>	1.54	(2.33) <sup>h</sup>	
群平均	1.95	(1.54)	1.81	(1.08)	0.96	(1.42)	父、母 > 子

注) 同じアルファベット間に有意差が認められていることを意味する。

Table 3 感情尺度の分散分析結果

	High-Alex 群		Med-Alex 群		Low-Alex 群		F 値 (df=2,78) 多重比較(Tukey 法)	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD		
感情体験								
楽しさ	4.19	(0.39)	4.09	(0.87)	4.03	(0.98)	0.12	
悲しみ	3.44	(0.78)	2.84	(0.84)	2.52	(1.00)	3.57*	High > Low
怒り	3.03	(0.68)	2.66	(0.93)	2.50	(1.23)	1.02	
恐れ	2.75	(0.96)	2.38	(0.93)	2.36	(0.88)	0.82	
感情表出								
楽しさ	4.06	(0.71)	3.78	(0.98)	3.82	(1.06)	0.41	
悲しみ	2.58	(0.78)	2.31	(0.91)	2.07	(0.59)	1.05	
怒り	2.69	(0.66)	2.62	(0.93)	2.27	(1.01)	0.77	
恐れ	2.17	(0.64)	2.36	(0.99)	1.86	(0.55)	1.48	
感情抑制								
楽しさ	1.42	(0.61)	1.66	(0.84)	1.42	(0.79)	0.74	
悲しみ	2.69	(1.11)	2.70	(0.98)	2.50	(0.89)	0.20	
怒り	2.68	(1.09)	2.57	(1.04)	2.32	(1.09)	0.37	
恐れ	2.44	(1.20)	2.52	(1.05)	2.39	(0.92)	0.09	
家族同士の感情表出								
楽しさ	4.19	(0.72)	3.94	(0.91)	4.03	(1.09)	0.41	
悲しみ	2.83	(0.72)	2.53	(0.86)	2.39	(0.54)	0.99	
怒り	2.60	(0.73)	2.66	(0.83)	2.41	(0.66)	0.44	
恐れ	2.96	(0.61)	2.54	(0.79)	2.14	(0.44)	3.60*	High > Low

\* $p < .05$ 

( $F(4,156) = 2.10, p < .10$ )、単純効果の検定を行った。その結果、母と子におけるアレキシサイミアの効果と、High-Alex 群と Med-Alex 群における家族成員の効果が有意であった（順に  $F(2,184) = 4.13, p < .05$ 、 $F(2,184) = 3.49, p < .05$ 、 $F(2,156) = 6.01, p < .01$ 、 $F(2,156) = 23.28, p < .01$ )。これらについて HSD 法による多重比較を行ったところ、High-Alex 群は父、子と比較して母親の影響力が強く、しかも、その影響力の強さは他の 2 群 (Med-Alex 群、Low-Alex 群) よりも高い点特徴的であった。

#### 感情尺度についてのデータ解析

設定した 4 つの感情カテゴリー（「楽しさ」、「悲しみ」、「怒り」、「恐れ」）についてアレキシサイミア (High-Alex 群・Med-Alex 群・Low-Alex 群) を参加者間要因とする 1 要因の分散分析を行った (Table 3)。なお、質問内容は、家族内における感情体験、感情表出、感情抑制と家族同士での感情表出の 4 種類あるため、それぞれ分けて同様の分散分析を行った。その結果、感情体験の「悲しみ」において有意な主効果が認められ、Tukey 法による多重比較の結果、High-Alex 群が Low-Alex 群よりも悲しみ感情を家族内で多く体験していることが明らかになった。また、

家族同士での感情表出の「恐れ」についても有意な主効果が認められ、多重比較の結果、High-Alex 群が Low-Alex 群よりも家族同士でお互いに恐れ感情を表出していることが明らかになった。

以上の結果から、家族内が葛藤状況下にあるときにアレキシサイミアの違いが認められることが示され、それ以外の家族内生活では問題が顕在化しないことが明らかになった。つまり、アレキシサイミアの家族内における問題は、状況特異的に生じるものであり、それらを考慮していない質問紙調査研究では明らかになりにくい点を示したといえる。具体的に葛藤状況下での特徴をまとめると、他の2群とは対照的に High-Alex 群は葛藤状況下にあるにもかかわらず、父母間の親密性が高く、かつ母親の影響力が非常に高いことが、子どもがアレキシサイミアの家族機能の特徴と言える。

また、感情尺度の結果では、子ども自身が普段から悲しみ、落胆、罪悪感、申し訳なさを家族内で感じやすく、家族同士ではうろたえ、不安、恐れ、心配といった感情をお互い表出しあっていることが明らかになった。一方、予想に反して、家族内での感情表出や感情抑制にはアレキシサイミアの違いが認められず、家族内と家族外で感情表出や感情抑制の仕方が異なっていることが示唆された。

## 考 察

本研究では、アレキシサイミアの子どもがおかれている現在の家族環境に注目し、特に両親と子どもの3者関係の親密性と階層性が、家族内におきる状況変化に応じてどのように変化するかアレキシサイミアの観点から検討した。その結果、子どもがアレキシサイミアの家族は、現実場面や理想場面では他の群と違いは認められないが、葛藤事態が家族内に生じたときの家族成員の距離や力動関係が他の2群とは異なることが明らかになった。一般的に、葛藤状況下ではネガティブな感情表出が促進されるため、夫婦間や両親と子どもの親密性は低くなり距離が長くなることが明らかになっている(池田, 1996)。しかしながら、アレキシサイミアの家族では、3者間の親密距離は近く、統計的には両親間の距離が他の2群よりも有意に短くなっていた。池田(2000)は、親への依存的傾向の強い学生は、父母子の3者間の親密さをいずれも非常に高く認知していることを指摘しているが、本調査におけるアレキシサイミアの特徴も類似しており、家族内における依存性の高さがアレキシサイミアの現在の家族の特徴と言い換えることができるであろう。特にこれらの特徴が葛藤事態で顕著であることを踏まえれば、家族成員それぞれの自律性が阻害され、お互いが問題に巻き込まれやすい家族特徴を有していることを推測するのは容易なことである。これらの特徴は、アレキシサイミアの過去の家族環境要因の特徴として、葛藤体験や纏綿状態の高さを指摘した Kench and Irwin (2000) の報告と一致点が多いと言える。また、家族の感情表出性の側面から捉えると、多くの研究が指摘しているように (Kench & Irwin,

2000; Yelsma et al., 2000; Yelsma et al., 1998)、家族成員相互における自由な感情表出のしにくさが、アレキシサイミアの家族に特徴的な距離の近さに反映していると言い換えることができるかもしれない。あるいは、アレキシサイミアの子どもが家族から分離することへの恐怖が強いという King and Mallinckrodt (2000) や Mallinckrodt et al. (1998) の報告にもあるように、子ども自身が家族内のストレス状況下で、両親と距離をおくことの難しさも影響しているかもしれない。

階層性の側面からは、他の2群が葛藤場面における父親の影響力の強さを特徴としているのと同様に、アレキシサイミアの家族では母親の影響力が最も高く、子どもは両親のいずれよりも影響力が低いことが明らかになった。親密性距離では、アレキシサイミアの両親間の親密距離が近いこと、アレキシサイミアの家族では、子ども自身が母親、あるいは両親によって非常に強い干渉を受けやすいことを意味している。このことは同時に、仮にアレキシサイミアの家族において葛藤事態が長期間持続することになれば、アレキシサイミアである子どもはその状況を回避することができず、ネガティブ感情状態が持続しやすいことを意味している。実際、感情尺度の結果では、アレキシサイミアである子ども自身が、普段から悲しみ、落胆、罪悪感、申し訳なさを家族内で強く感じており、家族同士では、うろたえ、不安、恐れ、心配といった感情をお互い表出していることが明らかになった。馬場・山本・佐藤・鈴木 (2002) は、日常生活全般における感情エピソードの開示欲求の違いについて検討するなかで、アレキシサイミアは、悲しみ感情について話したいと思うことは少なく、その感情を抱え続けることで精神的な健康が悪化しやすいことを指摘しているが、この結果を踏まえると、家族内の葛藤状況下には更にネガティブ感情が増加、蓄積されることを予想するのはたやすいことである。

馬場・佐藤・鈴木 (2003) や馬場・佐藤・鈴木 (2001) は、アレキシサイミアは他者依存的な対人関係の特徴を有していることを指摘しているが、家族内のシステムに注目した本研究は、同様の対人パターンが家族内でも生じていることを明らかにした。葛藤状況が生じた場合、自ら回避できない状態に陥りやすく、家族内での葛藤事態の生じやすさによってアレキシサイミアの精神的・身体的健康の悪化が影響を受けやすいと言えるであろう。家族機能を測定する Family Assessment Device (FAD) を用いた研究では、家族の全般的機能 (General functioning)、情緒的関与 (Affective involvement)、行動統制 (Behavior control)、問題解決 (Problem solving) といった家族機能の低さが現在のアレキシサイミア傾向と関連性が高いことを報告しており (Lumley et al., 1996)、馬場・佐藤 (2003) による検討でもほぼ同様の結果が得られている。アレキシサイミアの家族環境要因として注目すべき点は、家族成員に対する依存性の高さ、自律の難しさ、纏綿状態、そして、解消されないネガティブ感情にあると言えるであろう。

本研究では、従来から行われてきた質問紙研究では明らかにされていなかった家族システムの特徴について、状況による違いが生じやすいことを明らかにした。しかしながら、国際基準である最新尺度 TAS-20 を用いていないという点で限界があると言える。また、家族システムの配置

について、実際には祖父母や兄弟の配置も行われている場合があるなかで、父母本人の3者関係の距離に限定して親密度や階層性を指標として分析を行っている。特に葛藤状況がどのような状況であるかは配置された家族によって様々であり、今後は、葛藤場面の状況やそでの表現対象を3名にあらかじめ設定し、その中での表現を検討していく必要があると思われる。

## 引用文献

- 馬場天信・佐藤豪（2003）. Alexithymia 傾向と家族機能との関連性について. 日本性格心理学会第12回大会発表論文集, 140-141.
- 馬場天信・佐藤豪・鈴木直人（2001）. Alexithymia と人格特性－人格5因子理論と Cloninger の気質・性格7次元モデルからの検討－. 同志社心理, **48**, 29-39.
- 馬場天信・佐藤豪・鈴木直人（2003）. 交流分析理論からみた Alexithymia. 同志社心理, **49**, 44-50.
- 馬場天信・山本恭子・佐藤豪・鈴木直人（2002）. Alexithymia 傾向者の感情体験開示抑制因の差異について. 日本健康心理学会第15回大会発表論文集, 124-125.
- Bagby, R. M., Parker, J. D. A., and Taylor, G. J. (1994). The Twenty-item Toronto Alexithymia Scale – I. Item selection and cross-validation of the factor structure. *Journal of Psychosomatic Research*, **38**, 23-32.
- Bagby, R. M., Taylor, G. J., and Parker, J. D. A. (1994). The Twenty-item Toronto Alexithymia Scale – II. Convergent, discriminant, and concurrent validity. *Journal of Psychosomatic Research*, **38**, 33-40.
- Berenbaum, H., and James, T. (1994). Correlates and retrospectively reported antecedents of alexithymia. *Psychosomatic Medicine*, **56**, 353-359.
- Fukunishi, I., and Rahe, R. H. (1995). Alexithymia and coping with stress in healthy persons: Alexithymia as a personality traits is associated with low social support and poor responses to stress. *Psychological Reports*, **76**, 1299-1304.
- Fukunishi, I., Sei, H., Morita, Y., and Rehe, R. H. (1999). Sympathetic activity in alexithymics with mother's low care. *Journal of Psychosomatic Research*, **46**, 579-589.
- ゲーリング, T. M.・八田武司・池田和夫・相谷登（1997）. FAST (Family System Test) マニュアル: ユニオンプレス.
- 池田和夫（1996）. 日本人大学生における家族構造認知の特徴－Family System Test による国際比較－. 高知大学人文学部人文学科 人文科学研究, **4**, 11-19.
- Kench, S., and Irwin, H. J. (2000). Alexithymia and childhood family environment. *Journal of Clinical Psychology*, **56**, 737-745.
- King, J. L., and Mallinckrodt, B. (2000). Family environment and alexithymia in clients and non-clients. *Psychotherapy Research*, **10**, 78-86.
- 小牧元・前田基成・有村達之・中田光紀・篠田晴男・緒方一子・志村翠・川村則行・久保千春（2003）. 日本語版 The 20-item Toronto Alexithymia Scale (TAS-20) の信頼性, 因子妥当性の検討. 心身医学, **43**, 839-846.
- Lumley, M. A., Mader, C., Gramzow, J., and Papineau, K. (1996). Family factors related to alexithymia characteristics. *Psychosomatic Medicine*, **58**, 211-216.
- Mallinckrodt, B., King, J. L., and Coble, H. M. (1998). Family dysfunction, alexithymia, and client attachment to therapist. *Journal of Counseling Psychology*, **45**, 497-504.
- 宮岡等・寺田久子・濱田正恵・北村俊則・片山義郎・中山雅子（1991）. 心身症の発症機序と病態における alexithymia の意義に関する研究－Alexithymia に関する評価上の問題点と評価方法の妥当性について－. 厚生省精神神経疾患委託研究 平成2年度研究成果報告書, 73-79.

- Shaver, P., Schwartz, J., Kirson, D., and O'Connor, C. (1987). Emotion knowledge : Further exploration of a prototype approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 1061–1086.
- Sifneos, P. E. (1973). The prevalence of 'alexithymic' characteristics in psychosomatic patients. *Psychotherapy and Psychosomatics*, **22**, 255–262.
- Sifneos, P. E. (1996). Alexithymia : Past and present. *American Journal of Psychiatry*, **153**, 137–142.
- Taylor, G. J. (1984). Alexithymia : Concept, measurement, and implications for treatment. *American Journal of Psychiatry*, **141**, 725–732.
- Taylor, G. J., Bagby, R. M., and Parker, J. D. A. (1997). *Disorders of affect regulation – Alexithymia in medical and psychiatric illness –*. Cambridge : Cambridge University Press. (テイラー J. G. バグビー R. M. パーカー J. D. A. 福西勇夫・秋本倫子 (訳) (1998) アレキシサイミア –感情制御の障害と精神・身体疾患 : 星和書店.)
- Taylor, G. J., Ryan, D. P., and Bagby, R. M. (1985). Toward the development of a new self-report alexithymia scale. *Psychotherapy and Psychosomatics*, **44**, 191–199.
- Wearden, A., Cook, L., and Vaughan-Jones, J. (2003). Adult attachment, alexithymia, symptom reporting, and health-related coping. *Journal of Psychosomatic Research*, **55**, 341–347.
- Wearden, A. J., Lambertson, N., Crook, N., and Walsh, V. (2005). Adult attachment, alexithymia, and symptom reporting an extension to the four category model of attachment. *Journal of Psychosomatic Research*, **58**, 279–288.
- Yelsma, P., Hovestadt, A., Anderson, W. T., and Nilsson, J. E. (2000). Family-of-origin expressiveness : Measurement, meaning, and relationship to alexithymia. *Journal of Marital and Family Therapy*, **26**, 353–363.
- Yelsma, P., Hovestadt, A. J., Nilsson, J. E., and Paul, B. D. (1998). Clients' positive and negative expressiveness within their families and alexithymia. *Psychological Reports*, **82**, 563–569.

2013年12月23日受理